

2019年度紀要の発刊にあたり

Introduction



デジタルハリウッド大学 デジタルコミュニケーション学部 教授
デジタルハリウッド大学大学院 デジタルコンテンツ研究科 教授

木原 民雄

Tamio Kihara

メディアアーティスト、メディアデザイン研究者。メディアデザインの仕掛けや仕組みの探求、メディアアートの企画制作展示方法を主な研究テーマとしている。

青山学院大学大学院理工学研究科経営工学専攻博士前期課程修了後、日本電信電話株式会社入社。NTT研究所にて、ネットワークマネジメント、映像データベース、コミュニティウェア、デジタルサイネージなどの研究開発に従事し、サービス企画や研究戦略にも携わる。その間、東京大学先端科学技術研究センター協力研究員、総務省大臣官房調査員などを併任。2007年東京大学大学院にて博士(情報理工学)。2013年より2019年まで昭和女子大学生活科学部環境デザイン学科デザインプロデュースコース教授。2019年4月よりデジタルハリウッド大学及び大学院教授。総合企画演習、デザイン概論、メディアアートゼミ、メディアデザインラボなどを担当。

1996年頃よりメディアアートの制作を開始。NTT/ICC「ICC子供週間」などでの作品展示、東急文化会館のプラネタリウムシステムの作品や横浜高速鉄道みなとみらい駅の「みらいチューブ」の企画制作、文化庁メディア芸術祭愛知展で木本圭子との作品展示、佐世保市博物館島瀬美術センターの「感じる文学—動く・触る・薫る—」展の技術監修、アーバンコンピューティングシンポジウムシリーズや共創プラットフォーム研究会などの企画運営を手がけた。最近では、電子工作と手芸を組み合わせたワークショップの講師も務める。

情報処理学会ではマルチメディア通信と分散処理研究会幹事、論文誌特集号編集委員長などを歴任。

1997年Prix Ars ElectronicaのInteractive Art部門でHonorary Mention、情報処理学会山下記念研究員、2017年情報処理学会マルチメディア通信と分散処理ワークショップ最優秀論文賞など受賞多数。

『DHU JOURNAL - デジタルハリウッド大学 紀要』の第6号をお届けする。

今年は、デジタルハリウッド設立25周年、専門職大学院が開校して15年、4年制大学の開校から14年となる。デジタルコンテンツ領域を中心とした様々な学術的課題に対して、理論と実務を架橋する高度な研究活動の発表の場としてこの紀要が発行され、6年目となる。

今回も、本学らしい研究成果が集まった。純粋に基礎理論的なものから社会実装を行う実証実験まで、異なる領域を横断して融合的に連携している研究テーマが多く、渾然一体となった創発の結び目となっている。

特に、この研究領域が成熟してきたことの証として、長期の継続的な研究活動の紹介を取り揃えることができたことを強調したい。

また、株式会社である本学の特色のひとつに教員と職員の協働があり、研究者である教員からだけでなく、職員からの教育や大学事業の推進に関わる研究成果も多くなっている。

ぜひ全体を通読して、本学の研究活動の成長を感じ取っていただきたい。

昨年度の紀要から、編集委員会を組織して査読体制を整えた。今年度は、更に体制を強化し、論文と研究ノートについては、外部の方々に査読のご協力をいただき、新たにメタ査読の仕組みを取り入れ、必要に応じて再査読も行って質の向上に努めた。

ショートレポートと報告は査読の対象ではないため、クオリティ不足を感じられるかもしれないが、筆者らの現状がそのまま立ち現れているものとして、大らかな気持ちで優しく見守っていただきたい。

この紀要は、これまで研究論文を書いたことのない実務家や学生が、初めてその機会を得る場でもある。あまり論文らしくないものもあるかもしれないが、萌芽的な試みを排除せず、旧来の様式に無理に従うことをせず、それぞれの研究者の野生的なままの表現をなるべく残すようにしたのも今回の編集方針である。

本学に関わる多くの仲間が、お互いの活動と成果に視線を向けあい、この研究領域で新しく研究資産を形づくり歴史を積み重ねていくことに参画したいという気持ちを誘うことができれば嬉しい。

この先、新しい紀要をお届けするごとに、本学の未来へ向けて軽やかに挑戦し続ける加速度的に感じられるようにしたい。同時に、伝統的で学術的な文脈や様式で客観的な評価を受けても十二分に存在感があるということを示していきたい。

ご期待いただきたい。

編集幹事

木原 民雄 デジタルハリウッド大学/大学院 教授